

ロックフェスティバルの歩みと課題

ーコロナ禍前と現在を比較してー

井之脇 直人

かつてレコードやCDなどの録音媒体を収益の柱としていた日本の音楽業界であるが、ネット配信の普及により録音媒体での収益が望めなくなった。減収が続く日本の音楽業界において、ロックフェスティバルは常に盛況である。しかし2020年、ロックフェスティバルはコロナ禍によって開催中止や否定的な意見が相次いだ。本論文では2022年に開催し始めたロックフェスティバルは、どのような対策をして行っているのか、コロナ禍前のロックフェスティバルと比較し明らかにしていく。そして今後のあり方や課題について考察する。

先行研究ではロックフェスティバルの経済効果や参加者行動を中心にした研究が多い。ロックフェスティバルは非日常性を楽しめ音楽イベントとして人気があると同時に、地域活性化や経済効果に影響を及ぼすことができるイベントであることが明らかになっている。

現在、コロナ禍でのロックフェスティバルはどのような対策をして開催しているのかを知るために参与観察を行った。対象はROCK IN JAPAN FESTIVAL 2022での2日間である。実際に足を運ぶことで、コロナ禍以前にはなかった入場時間指定制や前方エリア制度などを行っていることを知ることができた。ただし、入場後の参加者行動に制限があまり見られなかったため、今後の改善点がはっきりと分かった。筆者はコロナ禍前にも参加したことがあるため、コロナ禍前との比較もすることができた。

さらにロックフェスティバルの現状を知るために認知度アンケートも行った。対象は20代前半の大学生である。ロックフェスティバルに参加している世代で最も多いのが20代前半である。また音楽を最も聴く世代も20代前半である。このアンケートではロックフェスティバルの知名度が上がっていることが明らかになると同時に、ロックフェスティバルに対して固定概念を持っている意見も多く見られた。チケットの価格やコロナ感染の恐れなど、参加しづらいという意見が多くあったことから、今後より多く集客するためには誰もが参加しやすいロックフェスティバルを追求していくことが求められる。

参与観察、アンケート結果と先行研究を合わせると、コロナ禍でロックフェスティバルを開催するためには自己管理の徹底、コロナ感染対策グッズの配布・所持の2点が重要だと考える。ロックフェスティバルは今後もコロナ禍開催が続くと予想されるため、今後の動向に注目したい。